

III. 南阿 Durban で採集した緑藻 Chlamydomonadaceae の *Chlamydomonas* 属の6新種について記載した。種への検索表と各種の記載、図をつけてある。(野田光蔵)

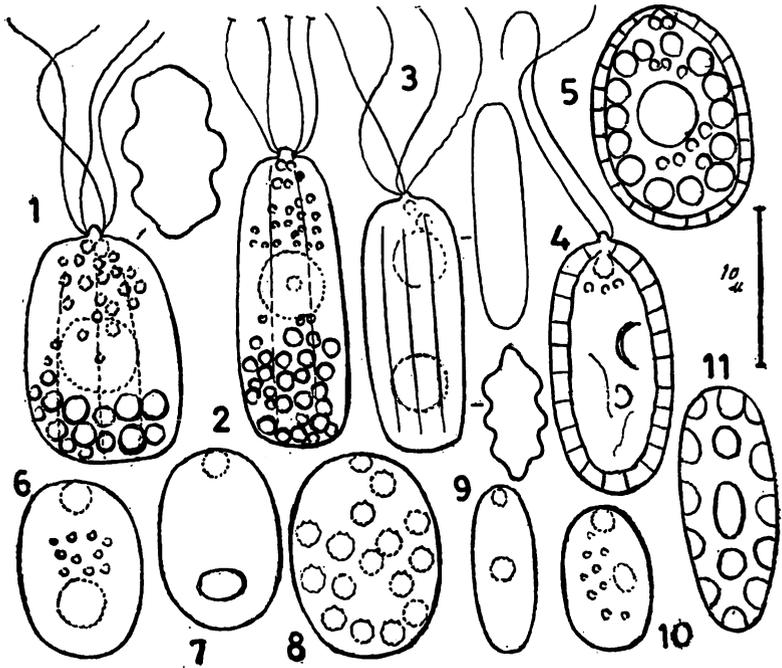


Plate I

- 1-3. *Silvamonas lobata* 4. *Sphaerella papillata* 5. *Sphaerella saupaulensis* 6. *Chlamydomonas burchallii* 7. *Chlamydomonas hemessyi* 8. *Chlamydomonas cholnokii* 9. *Chlamydomonas durbanica* 10. *Chlamydomonas selviniae*

ネレオアマノリ (新称) について

福原英司*

まえがき

Porphyra nereocystis はアメリカのカリフォルニヤからカナダをへてア

* 北海道区水産研究所

The Bulletin of Japanese Society of Phycology Vol. XV. No. 1, April 1967.

ラスカにいたる沿岸に特産のアマノリとして古くから知られ、特に葉体の巨大なことで有名である。ところが昭和38年7月1日に北大水産学部練習船おしよろ丸がベーリング島近海において鮭鱒流網の実習中、網におびただしいアマノリの着生したブルウキモがかかった。筆者は、そのアマノリを観察し *Porphyra nereocystis* に同定して誤りないという結論に達したので、簡単に報告する。

本論に入るに先立ち、貴重な標本を提供してくださった北大水産学部教授時田鯨博士と文献や標本を見せていただいた北大理学部名誉教授山田幸男博士に感謝の意を表します。

観 察 結 果

標本は 55°21'N, 166°31'E でブルウキモに着生して漂流していたもので、

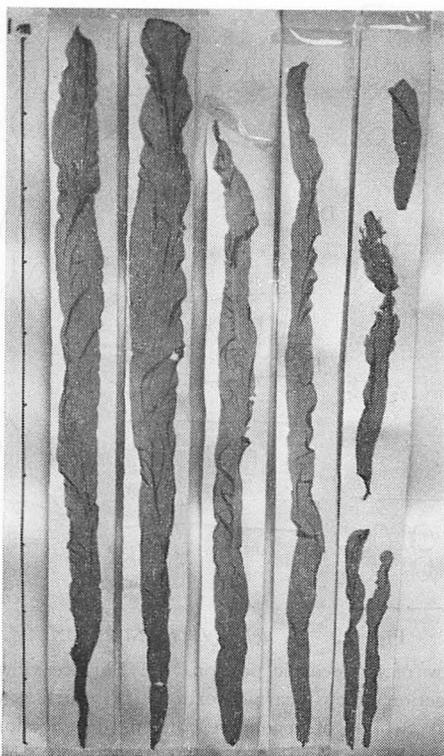


Fig. 1. *Porphyra nereocystis* ANDERSON. $\times 1/12$

イトグサの1種や他の藻類も少量の着生が認められたがブルウキモの茎の全表面にアマノリが密生していた。このアマノリは幼体から成熟したと思われるものまであって、大きさは1m以上のものが多く、1.5m以上の長いものも稀ではなかった。また、幅は5~10cmで、いずれも細長く、形の変異は非常に小さい。また、色は赤味が強くウタスツノリやカヤベノリとよく似ている。基部の形はとがっているものが大部分で、心臓形のものは見られなかった。また、付着器官の構造もアサクサノリ、スサビノリ、その他大多数のアマノリと差は認められず、オオノノリのようにhostの内部に入りこんでいるものは見当らなかった。次の成熟した個体は比較的少数であったが monoecious で、果孢子囊と精子囊は周辺部に不規則に形成され、果孢子囊の部分は厚さ70~80 μ で、その分裂式は $8\left(\frac{a}{2}, \frac{b}{2}, \frac{c}{2}\right)$ あった。精子囊の部分も、

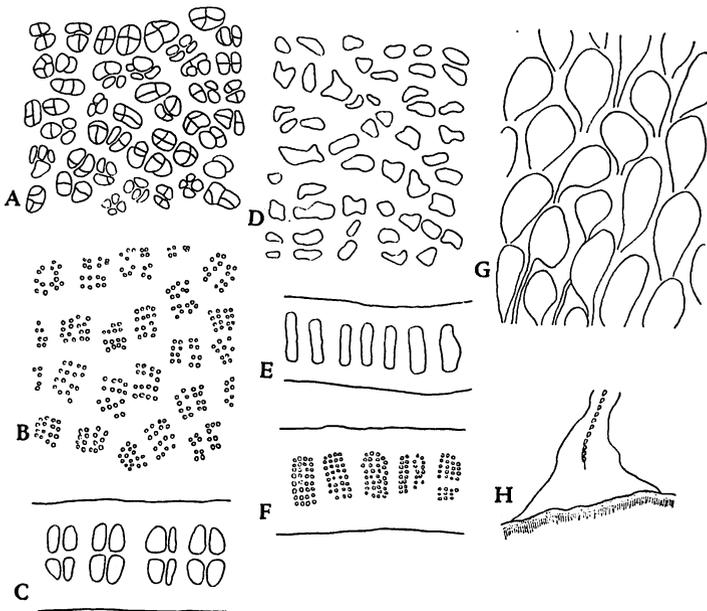


Fig. 2. *P. nereocystis* ANDERSON.

A: Surface view of cystocarpic portion. B: Surface view of antheridial portion. C: Section of cystocarpic portion. D: Surface view of vegetative portion. E: Section of vegetative portion. F: Section of antheridial portion. G: Lower most cell with rhizoidal filament. H: Longitudinal section of basal part. A~G, $\times 250$. H, $\times 60$.

ほぼ同様の厚さで、その分裂式は $128\left(\frac{a}{4}, \frac{b}{4}, \frac{c}{8}\right)$ であった。また、栄養細胞の部分は $45\sim 55\mu$ の厚さで、横断面では高さは幅の2倍以上であるが、ホルマリンによって細胞がゆがんでいるので正確ではない。また、同様の理由によって栄養細胞の表面観、色素体あるいはピレノイドについても明らかではない。根様糸細胞は比較的丸形で、大きさは高さ $20\sim 40\mu$ 、幅は $15\sim 25\mu$ であった。

以上の観察結果と ANDERSON, HUS 及び SMITH 等の記載をもあわせて検討し、また山田博士が1929年にカリフォルニアのモスビーチで採集された標本と比較した結果、果胞子嚢のできかたにだけ相違点がみられたが *Porphyra nereocystis* ANDERSON に同定した。

考 察

HUS によれば、本種の果胞子嚢の分裂式を $32\left(\frac{a}{4}, \frac{b}{4}, \frac{c}{2}\right)$ とし、SMITH も式は記載していないが、果胞子嚢には32の果胞子が入っているとしている。これに対し筆者の観察したものは8であるが、観察した標本のうち果胞子嚢や精子嚢の形成されているものが5%以下であったことと、HUS の記載で「長さ最大 270 cm, 幅 40 cm」としているのに、筆者の標本では長さ 180 cm, 幅 15 cm 以上のものが無い等の諸点を考えると成熟不十分であったものと考えられる。

なお、本種の host であるブルウキモは北海道東部地方にときどき打上げられることが知られており、本種も同地方へ打上げられることが予想されるので、日本国内に生育する種類ではないので、変則的ではあるけれども和名をつけておくことが便利であると考え、host の学名にちなんでネレオアマノリと呼ぶことにした。なお、ネレオアマノリはその長さから考えて日本国内産のどの種類のアマノリよりも成長が良いのではないかと想像される。

また、HUS によると、本種は epiphytic のものばかりとは限らないで、石にもよく着生し、カリフォルニア在住の中国人は昔から食用に供していたという。筆者が付着器官の構造を観察した結果によっても本種はかなりの種類の基物上で生育できるものと考えられる。

なお、SMITH によると本種は11月から6月まで生育しているという。

Summary

This report deals with the brief description of *Porphyra nereocystis* ANDERSON attaching to *Nereocystis luetkeana* (MERT.) P. et R. which was collected near Bering Island by the training boat "Oshoro Maru" of the Hokkaido University in July 1964.

文 献

- 1) ANDERSON, C. L. (1891): List of California marine algae with notes, *Zoe*, **2**, 217-225. 2) HUS, H. T. A. (1902): An account of the species of *Porphyra* found on the Pacific coast of North America. *Proc. Calif. Acad. Sci. ser. 3, Bot.*, **2**(6), 173-240. 3) SMITH, G. M. (1943): Marine algae of the Monterey Peninsula. 622 p. Stanford Univ. press. 4) 時田郁 (1939): 北海道釧路沖に *Nereocystis* 漂流す。植物及動物, **7**(11). 96-97. ——— (1962): ブルウキモの漂着, 藻類, **10**(3). 16-19.

スサビノリの和名と、いわゆる トモエノリについて

福 原 英 司*

スサビノリは1932年、殖田によって新種として発表され、現在では日本産アマノリ属のなかで最も普通の種類であることは、よく知られているとおりである。

しかし、その原産地については多少の問題点もあり、また和名の由来についてもアサクサノリやウツプスイノリにくらべると、一般に知られていないので、これらの点について若干の論議をくわえたい。

まず第一に、スサビノリの基準標本は殖田の論文 Pl. XV 1~4 のものであるが、これは東京水産大学に所蔵され、すでに黒木も述べているように採集者は大野磯吉氏(元北海道水産試験場員)で産地は室蘭?となっており、採集年月日の記入はない。

一方、スサビノリという名前がはじめて文献にでたのは殖田の論文より24年前の1908年にでた遠藤吉三郎著 函館支庁管内ニ於ケル海苔業ノ将来

* 北海道区水産研究所

The Bulletin of Japanese Society of Phycology Vol. XV. No. 1, April 1967.